

首都圏発

2・3月は

エコロジー

「ミゾゴイ」を訪ねて

代表的在来生物／多様性保つ証し

ミゾゴイミゾゴイは日本でのみ繁殖し、絶滅が心配されるサギ科の渡り鳥だ。知名度は低いが、専門家は「在来生物の代表的存在」と指摘。リニア中央新幹線の予定地や都内の河川工事現場で話題になるなど、注目が増している。



1月下旬、ミゾゴイの巣が見たくて東京都の西多摩地区と長野県大鹿村の里山を専門家と歩いた。

ミゾゴイは里山の小さな沢の薄暗い茂みにひっそりと棲み、ミミズやサワガニを食べ、「ポオーツ、ポ

オーツ」と低音で鳴く。人目につかず、最近まで夜行性だと思われていたほどだ。

「どれが巣か、わかりますか」。鳥類研究者、川名

国男さんの指す方向を沢底から見上げた。10羽ほどの高さのケヤキの枝に、小枝を雑に編んだような皿状の古巣があった。人家や道路から近いが、外からは見えない。

そんな営巣地の一つが砂防工事で消えた。ミゾゴイ保護を求める住民団体によると、都西多摩建設事務所が昨年度、あきる野市の深沢川左岸の斜面林を伐採。コンクリート壁で固めた。

同事務所によれば、地元から災害防止の要請があった営巣を知らずに砂防工事を実施した。その後、住民団体からの申し入れなども

あり、工事予定区域で生物調査を続けるという。

川名さんは「ミゾゴイは在来生物の代表的存在。生息していれば、その地域は生物多様性が保たれている証しになる」と話した。

鳥や動物の鳴きまねで舞台を湧かせる江戸家猫八さん。国連生物多様性の10年

リニア予定地に営巣情報

JR東海のリニア中央新幹線計画は南アルプスをトンネルで貫き、東京―名古屋間を40分で結ぶ。環境影響評価の調査で、ルート上

日本委員会の地球いきもの応援団生物多様性リーダーも務めている。「ミゾゴイも、彼らが暮らせる環境も大事にしたい。知名度が低いから保護の機運が盛り上げられない」と心配し、もっと関心を持ってもらえたらと、3月からの舞台でミゾゴイに触れることにした。

が連なる。計画では、4本の作業用トンネルのうちの3本と変電所を小渋川沿いに建設。リニア本線は深い峡谷の小渋川の部分だけ地上に顔を出して橋で渡る。工事が始まれば人口約1100人の村の狭い道路を最大で1日1736台の大型タンポカーなどが走る。工事は約10年続く。

の大鹿村でミゾゴイ1羽を確認した。同社は「たまたま飛来した1羽で工事の影響はないと思う」と説明。必要があれば再調査などの対応をするという。

地元の県自然保護レンジャーの前島正介さんは「村内に鳴き声や目撃の情報が複数ある」と話す。毎年のように日記にミゾゴイの観察記録をつけている農家もいる。前島さんも営巣するミゾゴイを撮影した。

前島さんと村内を歩く。日本最大級の断層「中央構造線」が村を南北に貫き、地滑りの多発地帯という。小渋川の斜面には砂防ダム

複数のミゾゴイ確認情報がある長野県大鹿村



村内では、リニア問題をきっかけに若い世代を中心にした有志が「大鹿の100年先を育む会」を結成。前島久美代表は「村の自然をもっと知った上で、リニアを見据えた村の将来を考え、自分たちの思いを発信していきたい」として、6月に同会や日本野鳥の会伊那支部の有志によるミゾゴイ観察会を計画している。(斯波祥)

ミゾゴイ 体長50センチほどで体は薄い赤茶色。台湾やフィリピンなどで越冬し、4月ごろ飛来して営巣する。古くは「樋口守り」などと呼ばれ、農村では一般的な鳥だったという。最近では個体数が減少し、環境省のレッドリストでは絶滅危惧2類。

ケヤキの枝のミゾゴイの巣で、ひな3羽が孵化(ふか)した。2006年6月、東京・西多摩地区、川名国男さん撮影